

学習院大学祭

大学祭実行委員会企画

シンポジウム 毛沢東の死



11月1日

1時～4時

西4-102

“中国の赤い星”毛沢東が死んだ。9月9日のことである。その日全世界の新聞のトップは毛沢東死去の報道で埋められた。そして数日後には多くの雑誌が毛沢東の特集を組んだ。しかし多くの人の注目するところは、毛死後の中国はどうか、ということであった。多くの人にとって毛沢東の死はミグ25事件と同様の一つの政治的事件でしかなかった。そこには報道の華々しさと好対照的に、人々の内面への衝撃の皆無が存在していた。

私達は、毛沢東の死のもつ意味を考えるなかでもう一度中国とは私達にとって何なのかを考えていきたいと思う。そうすることを通じて、私達の日常感覚ではとらえがたい変貌する現代中国を理

解していききたいと思う。

井岡山から延安へ、大躍進から文化大革命、そして批林批孔へ。波乱に富んだ闘争の歴史そのものが彼の思想の歩みであり、中国革命の重々しい足どりである。そして苦渋に満ちたその足どりのなかに、私達は、果しなく重く深い“現代”そのものを見るのである。

毛沢東の死は明らかに革命中国の死を重く象徴している。そしてそれは、現代世界そのものが転機にあることを示唆している。

現代中国は明らかに大きく変貌している。米ソ平和共存に強く反発し、「反米武力総路線」を提唱し、ベトナムを始めとする各国民族解放闘争を支援していた毛沢東中国は、もはやない。そこにあ

と現代中国の行方

講師

中島嶺雄氏
(東京外語大学教授)

柴田穂氏
(サンケイ新聞社)



るのは「反覇権主義」をかかげながら、米国と癒着を深める現代中国があるだけである。かつて「大衆路線」の名のもとにソ連型官僚主義を弾劾していた毛沢東中国は、もはやない。そこにあるのは、四全人代で『新憲法』に党と国家の一元化を明記し、自らも官僚専制国家の道を歩む現代中国である。

私達の住む日本との関係においても現代中国は大きく変貌している。60年安保闘争、70年安保闘争を党機関紙『人民日報』で大きく報じ、その連帯を表明していた毛沢東中国、70年代前半の日米軍事同盟体制の強化に対し「軍国主義化を歩む」としてその危険性を警鐘していた毛沢東中国、このような毛沢東中国はもはや過去の中国である。今日の中国は「日米安保条約支持」を公言しては

ばからない。

IMF体制の崩壊と長期不況時代への突入。ベトナム解放と現代中国の変質。——明らかに一つの時代が終ろうとしている。それはまた、新たな時代への序章でもある。かかる中での毛沢東の死。それは、時代と時代の狭間でおきた象徴的な歴史的事態である。もはや毛沢東の死体は何も語らない。しかし彼の死は、私達新しい世代に多くの示唆を投げ与える。「虎踞まり竜磐わるとも今は昔に勝れり。人間の正道は是れ滄桑」(毛沢東)と。